

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2015.12) 平成26年度:8-11.

「消化器外科病棟における異常を感じた看護師の臨床判断の意味」

江口 卓也, 大久 雅也

「消化器外科病棟における異常を感じた看護師の臨床判断の意味」

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション
○江口 卓也、大久 雅也

【目的】

今回の研究は、日常において「何か変」と異常を察知する際の看護師が、何を手がかりに臨床判断をしているかを知ることが目的とする。

【方法】

対象：師長を除く、看護師 29 名

1) 質問紙法：(出血・薬剤・ドレーン・チューブ・療養上の世話)に関する異常と捉えた事象について調査、その場面の内容を自由記載する。

2) 面接法：2～7年目看護師 4 名に「何か変」と感じた体験を自由に語ってもらった。得られたデータは、逐語録とし類似した意味内容をカテゴリー化した。

【結果】

出血の項目では、＜反応の違い＞＜全身状態の違い＞＜排泄物の異常＞。ドレーン・チューブでは、＜量の変

化＞＜性状の変化＞＜症状の変化＞。薬剤では＜全身状態の変化＞＜患者の訴え＞＜通常とは違う感覚＞＜反応の変化＞。療養上の世話では、＜反応の違い＞＜普段との違い＞＜環境の違い＞。アンケートでは以上の 4 つの各項目で類似したものを合わせカテゴリーとした。面接では、【異常発見時の行動】【経験、知識からの予測】【急変時の対応に関する経験知】の 3 つのカテゴリーを見出した。【異常発見時の行動】では＜報告・相談をした＞＜状態の観察＞＜患者状況の把握＞【経験、知識からの予測】＜経験を生かす＞＜経験から根拠を知る＞【急変時の対応に関する経験知】＜変化を察する＞＜経験知から形式知へ＞のサブカテゴリーが抽出された。

【結論】

看護師が捉えたのは多くの看護観察に基づく非言語的サインであった。「何か変」と感じる根拠は、様々な人の経験した知恵の集積とし直感から確認作業へと変換していた。知識や患者の情報、経験に意味づけされ相互に関係し合う事が大切なのではないかと考える。

消化器外科病棟における 異常を感じた看護師の臨床判断の意味

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション
江口卓也・大久雅也

1. 目的

日常において「何か変」と異常を察知する際
看護師が、何を手がかりに臨床判断をしているか
を知る。

2. 方法

1)質問紙法：対象者は師長を除く看護師29名。
出血、薬剤、チューブ・ドレーン、療養上の世話
の4点に関する異常と捉えた事象の記載と、
その内容について自由記載してもらった。
各項目毎に類似した内容をカテゴリー化した。

2)面接法：対象者は2～7年目看護師4名。
「何か変」と感じた体験がどのようなものかを
自由に語ってもらった。
得られたデータは逐語録とし、類似した意味内容
をカテゴリー化した。

3. 結果

1) 質問紙

有効回答数：18件

1年目3名、2年目4名、3年目3名
4年目1名、5年目以上5名
10年目以上2名

質問紙回収率：62%

療養上の世話 31%
チューブ・ドレーン 25%
出血 17%

療養上の世話

反応の違い	落ち着きがない 返答がない 認知レベルが低下していた 視線が合わない 意識消失 声掛けに反応がない 見当識がない
普段との違い	今までと様子がう 足を引きずっていた
環境	巡回時、スリッパが不揃いだった ベッド周囲が散らかっていた 術後、ルート類に触れていた

チューブ・ドレーン

量の変化	排液量が急に増えた 排液量が急に減った
性状の変化	嫌なおいがした いつもと色が違う 色がくすんでいた ドレーンに血性の排液が増えた 性状が胆汁様に変化した 色が黒かった ドレーンが急に血性になった ドレーンが赤い
症状の変化	お腹が痛くなりだした 脇漏れの量が増えた

出血	
反応の違い	会話をしていたら急に返答がなくなった 視線が合わない 口数が少ない 表情がさえない なんかいつもより元気がない 全然焦点合わなくて、何かおかしいなって思った
全身状態の違い	息切れが廊下まで聞こえる 息がゼイゼイした声が聞こえてきた 顔が白い 意識がなくなった
排泄物の異常	便に血液が混じていた 便が黒ずんでいた 失禁が鮮血、コアグラ混じりであった

薬剤	
全身状態の変化	全身の発赤を認めた 搔痒感が出てきた 顔面、全身に紅潮 CT後膨隆疹が出た 咽頭喘鳴があった 咽頭のかゆみと、咳を訴えた 酸素飽和度が低下していた 体温の急な上昇
患者の訴え	寒くて震えが止まらない さむいんだよなって2回言った
通常とは違う感覚	コールがならない人からの緊急コール 呼吸の仕方でも皮膚の色も、あからさまに普段と違った
反応の変化	表情がなんか辛そう 声掛けに反応がなかった

2) 面接結果

3つのカテゴリーを抽出した。

- ・ 異常発見時の行動
- ・ 経験、知識からの予測
- ・ 急変時の対応に関する経験知

【異常発見時の行動】

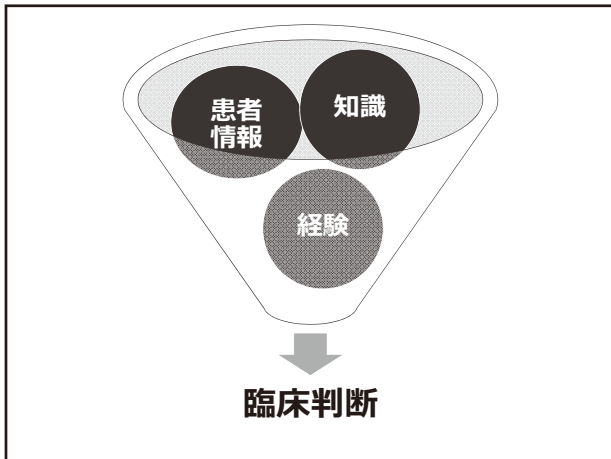
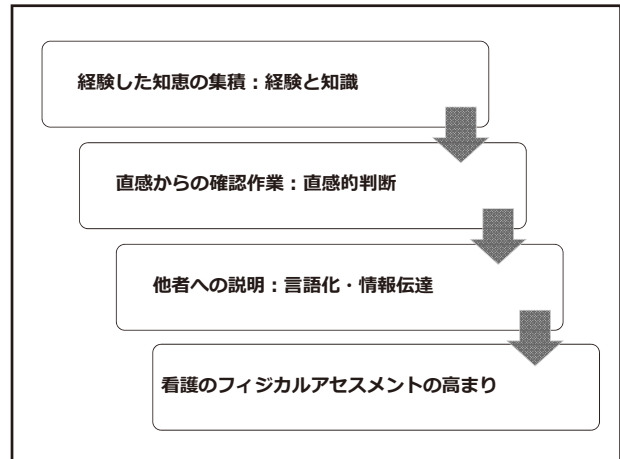
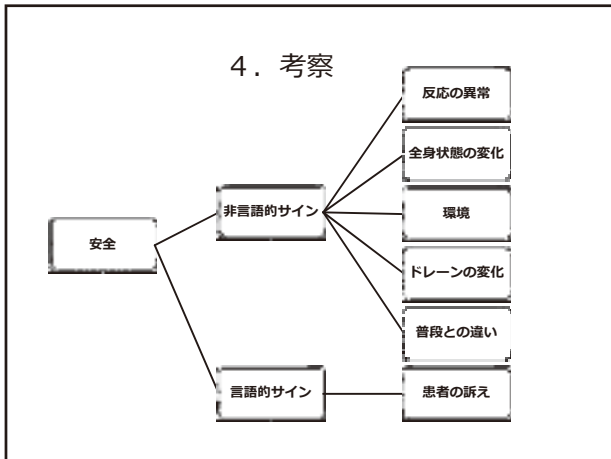
サブカテゴリー	コード
報告・相談をした	すぐに先輩をよんだ 自分では判断することができず先輩に報告した 緊急コールを押した
状態の観察	出血していると思い血圧を測った 発熱時、体温と血圧測定を行った ドレーンを確認した 腹部の観察を行った
患者状況の把握	医師のカルテやデータベースを確認し既往歴を アセスメントした 患者基本からアレルギーを確認した 今日の検査や指示を確認した 行われている処置、指示を確認した

【経験、知識からの予測】

サブカテゴリー	コード
経験を生かす	初回の抗がん剤・抗生剤は気をつけた ドレーンの出血は、臨時手術につながるため 早期発見が大事だ
経験から根拠を知る	症状のモニターは意味を分かり行う必要性を 感じている 医師から状況を聞かれ、共に考えた

【急変時の対応に関する経験知】

サブカテゴリー	コード
変化を察する	先輩の表情が凍りついていて何かを知った
経験知から形式知へ	度重なる生死にかかわる急変を経験した その経験がなければ気づかなかった 教科書にないことを先輩の姿や指導をうけ学んだ



5. 結語

看護師は患者の言語的・非言語的サインにより異常を察知し，経験によって培われた直観的分析と論理的分析とを駆使して臨床判断を行っていた。

【引用・参考文献】

1)杉本厚子他：異常を察知した看護師の臨床判断の分析, Kitakanto Med j 55,123-131,2005
 2)飯塚麻紀他：周手術期患者に対する病棟看護師の臨床判断 福島県立医科大学看護学部紀要 第13号 1-10, 2011